

文学史と文芸史の区別

森

修

文学史と文芸史という言葉はどのような区別をもっているのだろうか。文学史という言葉は、わが国の文学史の最初といわれる三上参次・高津敏三郎両氏の『日本文学史』(明治二十三年十月)以来一般に普通用いられてきた言葉である。これに対して文芸史という言葉が学術用語として使用されたのは、石山徹郎氏の『文芸学概説』(昭和四年三月)によって、文学という言葉のあいまいさが指摘され、文芸という言葉が専用されて、以来のことである。とくに岡崎義恵氏の日本文芸学の提唱によって、文芸・文芸学・文芸史という言葉づかいは一般の関心をもよぶにいたっている。文学史と文芸史という言葉には、このようにして用語としての新旧の差が一応そこにはみとめられる。しかし一方、日本文学研究の分野には文芸学以外に文献学や民俗学や歴史社会学の各立場に本づく研究がおこなわれており、その学派によって言葉の使用にもかなりの差がみいだされる。それゆえ文芸史という言葉はあたらしく吟味されながら、やはり各学派によって、あるいは文学史といい、あるいは文芸史ともちいられて、学術用語としてなお混用されている現状である。はたして文学史と文芸史はこのような単なる用語の差のままに放置しておいてよいのであろうか。用語の厳密さは同時にその内容の厳密さ

をとともなわねばならぬはずである。この点について一つの立場に固執することなく、両者の内容を吟味しつつ、その区別をかんがえてみたい。

それならば一体文学史とは何であるか。文学史とは作者によってつくられた作品が存在するところからはじまるものといえる。それは時代の進展につれて作者を交代しつつ、おおくの作品をうんでゆくもので、そこにうまれた作品の存在によって、文学史が構成される。このように作品の存在によって構成されたものを存在としての文学史と名づけておこう。そのばあいに作品は書物として存在するが、それは伝承のために書物の形をかつているにすぎず、その書物が読者によまれることによって、はじめて文学的目的を發揮するものである。その意味で存在としての文学史はよまれ、鑑賞されて、文学的認識がなされねばならぬ。このように文学的認識のなされたものを認識としての文学史と名づけることにしよう。認識としての文学史はしかし最初から全体的視野にたつものではない。作品に対する認識がひろくなるにつれて、作者としてのまとまり、時代としてのまとまり、という共通したものが意識され、ここに文学史の認識は客観化されて、学問的にきわめられることになる。このように学

間的に客観化されたものを学としての文学史と名づけることができよう。しかし学としてきわめられた文学史はそのままおわることなく、あたらしく敘述形態をとってまとめられるようになる。このようにまとめられた文学史を形態としての文学史と名づけることにする。以上のようにして文学史には最初存在としての文学史から形態としての文学史まで大体四段階の区別がかんがえられる。普通一般に文学史とよばれているのは、この最後の形態としての文学史をさすことがおおい。勿論文学史の形態には敘述目的によって色々の種類があり、かならずしも学問的なものとはかぎらぬが、しかし形態としての文学史の前提には学としての文学史がかんがえられ、また学としての文学史の前提にはさらに認識としての文学史が必要であり、認識としての文学史の、認識をえる根底には存在としての文学史がなければならぬ。そのばあいには認識としての文学史・学としての文学史・形態としての文学史はそれぞれ読者ないしは研究者によってよまれ、研究されてきたものである。そこに読者ないし研究者という共通した主体がみいだされる。これに対して存在としての文学史は読者ないしは研究者によってよまれ、研究されるところの対象である。これは読者ないし研究者という主体に対して、客体として存しているものである。(勿論作品の主体は作者であるが、これは文学の問題としてここではふれぬことにする。) それゆえ存在としての文学史とそれ以外の文学史とは、客体と主体という根本的に異なる性格をもっていることがしられるであろう。このような客体と主体とを区別して、客体すなわち存在としての文学史を文芸史と名づけ、主体すなわち認識としての文学史・学としての文学史・形態としての文学史をそのまま文学史とよべばどうであろう

か。

最初にのべたように文学史と文芸史という言葉は現在なお混用されたままおこなわれている。そのばあいには石山徹郎氏や日本文芸学の人人によって、文芸・文芸学・文芸史という言葉がもちいられたことは、用語の厳密さを期するうえから一つの功績であったといえよう。しかしそれにもかかわらずなお現在において、文学・文学研究・文学史という言い方がおおくもちいられているのは、学派の別をこえてそこに何らかの理由がなければならぬ。これについて文学と文芸という言葉のはたらきをかんがえてみると、たとえば「文学する」ということはいわれても「文芸する」とはききなれぬ言葉である。そのばあいには「文学する」とは創作活動をする意にもちいられる。これを文芸という言葉をもちいれば、文芸創作とことわらねばならぬであろう。いいかえると文学という言葉は主体のはたらきをふくんでいるが、文芸という言葉にはそれがなくようにおもわれる。その意味で文芸というのはむしろ客体的な存在をあらわすに適した言葉ではなからうか。文学者という言葉も学者と作家の両義をあらわしてあいまいであるが、しかしこれを文芸家といえば明確になるにもかかわらず、なお文学者という言葉がもちいられているのは「文学する」という言葉のふくむ創作活動と無関係ではない。このような文学という言葉の行動性をおもんじたのは戸坂潤氏であった(『戸坂潤選集』第八巻所収「認識としての文芸学」)。それに対して文芸という言葉が客体をあらわすに適していることは一方、岡崎氏の日本文芸学が静的(観念)美学を基礎として様式という形態をおもんじ、同時にその様式の変化する文芸史の意義を否定したこと(『文芸学概論』)ともかんがえあわされる。文学史と文芸史という言葉

葉についても、文芸史は作品の存在を示すに適し、文学史はその認識・学・ないしは形態敘述に適した言葉であるといえようとおもう。それゆえ文学史を研究するという意味で「文学史をする」ということはいえても、「文芸史をする」ということはなお落ちつかぬい方とおもわれる。それは文学史という言葉にはたらしきの意味をふくんでいるためではなからうか。このようにして文学史と文芸史という言葉のもつ語感と、一方ではその内容を吟味した結果、大體文芸史を存在としての文学史とし、文学史を認識としての文学史・学としての文学史・形態としての文学史としてかんがえておけば、その間に混用もなく、落ちつくものとおもう。

しかしそれにしても問題はのこっている。文学史と文芸史とを區別するよりも、文学史という言葉をやめて、文芸史と文芸史学という言葉をもちい、前者によって作品の存在をあらわし、後者によってその認識・学・敘述形態をあらわすことにすれば、かえって用語としての混乱もなく、すっきりするのではないかということである。しかしそれに対して用語が論理化されても、内容がそれにとまなうかどうかという疑問がある。「文学には子游・子夏」(『論語』先進第十一)といわれて以来、文学の意味する範囲は色々に変ってきている。それは時代の推移によって文学の領域が専門分化したともみられ、語史的にみて文学という言葉はいまいなものをふくんでいるわけである。これについて勿論専門領域にふさわしい用語をかんがえることは結構であろうが、用語としての適否という点では芸文がよいということになって(石山徹郎『芸文論』)、一般の使用例から遊離することもおこりえる。この意味で用語の選定はよほど慎重にせねばならぬであらう。一方また文学自体の問題としていうと、

歴史の推移とともに漸次あたらしい形態をうみだしてきたわけで、その形態という点では時代とともにひろがってゆく可能性がかんがえられる。今まで文学の範囲でなかったものも文学としてとりあつかわれるようになり、文学の範囲は次第にひろくなってきているわけである。いいかえると一方では文学の専門化がなされるとともに、他面その形態としての範囲はひろがり、前者の意味からいえば文学は純化され、後者の意味からいえば他と融合され、このような分化と融合の両面からみてゆくことが必要であらう。これを前者のみによって用語を限定すると、却って形式的に窮屈な面もでてくるとおもう。文学の定義は複雑であって、常に変化してゆく面をかんがえていかねばならぬ。このような文学のうごきは「文学する」という言葉にあらわされている。その点からみて文学史という言葉のもつはたらしきを無視することはできぬであらう。

それとともに一方、文学史研究は文学研究とおなじく、科学としてなりたつかどうかにまだおおくの問題をのこしている。科学としての文学史研究は今後の課題であるが、しかし文芸史(存在としての文学史)と文学史(認識としての文学史・学としての文学史・形態としての文学史)とは、作品とその研究として一応の區別ができるにしても、なお現代の段階としては、文学史も文芸史とおなじく、芸術的性格を帯びている点をかながえてみる必要がある。その意味で文学史のなかに作品と研究との両義を存したい方に、むしろ現代の文学史研究の課題が存しているのではなからうか。學術用語としてまぎらわしいものはつとめてさけねばならぬが、しかし文学史という言葉は排除することよりも、まずその根本の吟味から出発したいとおもう。(一九五六、八、二八)